坂田寺第６次調査成果概要

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
1990年7月3日
岩永省三

◎所在地　高市郡明日香村大字阪田字古宮
◎調査目的　県の遺跡整備に伴う広場・園路工事のための事前調査
◎調査期間　1990年5月28日～（継続中）
◎調査面積　約220m²

◎坂田寺とは

飛鳥寺の本尊（飛鳥大仏）を作った有名な仏師鞍作止利が７世紀初めに造った寺で、止利の父多須奈が用明２年（587）に天皇の病気回復を祈って建てた寺が前身と言われている。鞍作氏の氏寺であり、渡来人の寺として最も古い伝えをもち、豊浦寺と並んで飛鳥時代の代表的な尼寺であった。朱鳥元年（686）には、大官大寺・飛鳥寺・川原寺・豊浦寺とともに坂田寺で無遮大会が開かれ、格の高い寺であった。奈良時代では、坂田寺の尼信勝が天平勝宝元年（749）に、東大寺大仏殿の東脇侍を寄進している。西脇侍を寄進したのは法華寺の尼善光であり、そのことから、坂田寺は法華寺と並ぶほどの隆盛を誇っていたことが窺える。その後８世紀後半代には今回報告する仏堂・廻廊などが建立され、大規模な造営を行えるほどの勢力を有していたことがわかる。10世紀後半にはこの仏堂が倒壊するなどして衰えたが、延久２年（1070）の文書にはなお坂田寺の寺田に関する記載がある。その後、承安２年（1172）には多武峯の末寺となり、室町時代には興福寺最勝院の末寺となった。坂田寺の法燈を継ぐといわれる金剛寺が現在の位置に建てられたのは近世である。

◎従来の調査成果

当調査部では、1972年以降５回の調査を行ってきた。今のところ、文献に記された６世紀代に遡るような遺構は見つかっていない。マラ石周辺で行った第１次（1972年）・第２次（1974年）調査では７～11世紀の遺構が発見された。７世紀前半代には池、７世紀後半代には溝・土坑などがあり、７世紀前半代の遺構からは軒瓦や多数の丸瓦・平瓦、「卍」と記した墨書土器が出土し、鞍作止利が寺を整備した頃のものの可能性がある。７世紀代を通じて、マラ石周辺では寺の主要伽藍は存在しない。８世紀代に入ると、井戸・石組溝・石敷・掘立柱塀などが作られ、「知識」「真」などと記した寺院に関する墨書土器が出土している。９世紀になると、井戸を作り替え、その井戸から「□田寺」「厨」「南客」などの墨書土器が出土している。８・９世紀にはマラ石周辺には、寺の主要伽藍からはずれた厨のような附属施設があった可能性が高い。マラ石の南側では、８世紀に大規模な整地土盛をして東西方向に続く段を設け、そこに石垣（高さ約2.5m）を築いており、伽藍の中枢部に近いことが想定された。「坂田寺金剛寺跡」の石碑の南側で行なった第３次調査（1980年）では、８世紀後半に造営された西面する仏堂（SB150）が発見された。この建物は伽藍の中心建物の一つとみられ、基壇中央に須弥壇が築かれ、鎮壇具が埋納されていた。第４次調査（1982年）では、SB150の東北方でSB150と同じ方位の石組溝が発見され、玉石積基壇の一部と想定された。第５次調査（1985年）では、

第４次調査区の東方で基壇土の一部と鎮壇具を埋納した土坑が見つかり、SB150と相前後して造営された基壇建物の存在が明かとなっている。

◎今回の調査成果概要

調査地は第３次調査を行った水田の南側で、仏堂SB150の西南隅部にあたり、調査区南半には廻廊等の存在が想定された。調査の結果、仏堂の規模・構造が確定したほか、想定通り廻廊が検出できた。また、仏堂の建築部材・壁、廻廊の建築部材が比較的良好な状態で残っていた。

仏堂（８世紀後半）

長軸方向が北で西に約15°振れる南北棟で、西を正面とする。桁行５間・梁行２間の身舎の四面に庇がつき基壇上に建つ礎石建ちの建物である。今調査では、基壇、建物東南隅部の礎石４箇・柱・地覆・壁土を検出した。基壇規模は、南北28.3m（95尺）、東西16.7m（56尺）、高さ0.4mであり、礎石心から基壇縁までの距離は、東西・南北ともに1.8m（６尺）である。基壇化粧は花崗岩自然石を一段並べた簡単なもので、南面では基壇縁石が二重になったところが一部あり、改修を受けていると思われる。建物の柱間寸法は、身舎が3.9m（13尺）等間、庇の出が2.7m（９尺）であり、桁行総長24.7m（83尺）、梁行全長13.1m（44尺）となる。礎石は花崗岩を加工し円形柱座を造り出したもので、柱座の径は約60cmである。礎石３箇の上には腐触した柱の根元部分が残り、柱の径は約50cmである。側柱・妻柱の礎石間には、検出したすべての柱間について壁受けの地覆材と壁の根元部分が残っていた。地覆材は拳大ないしその２倍程度の自然石や塼・瓦を並べた上に置かれ、現状では上に乗る壁の重さでつぶれているが、一辺20cm前後の角材と復原できる。壁は厚さ15cmで木製の木舞を壁下地とし、それに黄灰色の壁土をつけて、表面には白土の仕上げを施している。基壇上面は粘質土で堅く固められており土間床であったらしい。基壇上および周辺から８世紀後半代の軒瓦がまったく出土しないことから、檜皮葺の可能性がある。この建物の廃絶時の状況については、第３次調査では焼失したものと考えられたが、今回新たな知見を得た。すなわち10世紀後半以前に建物の東方や南方から押し寄せた土砂で壁の根元まで埋まり、次第に立ち腐れの状況になり、建物内部にも壁際には土砂が流れ込んでいた。その後壁が倒れた。壁は東側柱筋ではおもに東へ倒れ、南妻柱筋ではおもに北へ倒れたとみられる。その直後、基壇や倒れた壁の上面で仏像・部材などを焼却し焼土層が形成された。第３次調査で検出した基壇・須弥壇直上の焼土層はこれにあたる。焼土に含まれる土師器からみて、廃材焼却は10世紀後半に行われたとみられる。その後焼土層上には瓦を多く含む粘土層が薄く堆積し、その上を厚く砂層が覆った。

廻廊（８世紀後半）

礎石建ちで、仏堂と主軸方向を揃えた南北廻廊を３間分、それと直交する東西廻廊を２間分検出した。南北廻廊は梁行１間の単廊で、仏堂に取り付くとみられ、桁行は５間となる。西柱列を仏堂の前面柱筋に揃えている。柱間寸法は桁行3.3m（11尺）、梁行３m（10尺）である。東西廻廊は梁行１間の単廊で柱間寸法は桁行・梁行ともに３m（10尺）である。礎石は花崗岩の自然石で径60～90cmである。礎石は地山を浅く掘りくぼめて据え付けられ、その後地山上に薄く基壇土を積む。廻廊の両側には素掘りの雨落溝がある。東雨落溝は幅1.6m・深さ0.4m、西雨落溝は幅1.5m・深さ0.4m、両雨落溝の心々距離は約6.2m、礎石心から雨落溝肩までの距離

は0.8～1.1mである。廻廊の内側には拳大の礫を敷きつめて舗装しているが、この舗装面と廻廊上面とは殆ど同じ高さである。基壇上および雨落溝内からは廻廊の建築部材が発見された。なかでも連子窓と、東西廻廊北雨落溝内からまとまって出土した部材が注目される。部材に混って檜皮が見られること、丸・平瓦の出土が少なく、軒瓦が皆無であることからみて檜皮葺と考えられる。

出土遺物

主要な出土遺物は、建築部材、軒丸瓦・軒平瓦、丸瓦・平瓦、塼仏、土器類、木心乾漆仏断片、銅鏡などである。建築部材は仏堂・廻廊にともなうもので、仏堂では柱・地覆、廻廊では連子窓・柱・頭貫・大斗・巻斗・蟇股などがある。山田寺の部材に比して全体に小振りである。軒瓦は17点しかなく、しかも８世紀前半以前ないし平安時代に属し、仏堂や廻廊に伴うものではない。土器類には土師器・須恵器・三彩がある。木心乾漆仏断片は仏堂上の焼土層から出土した。

◎まとめ

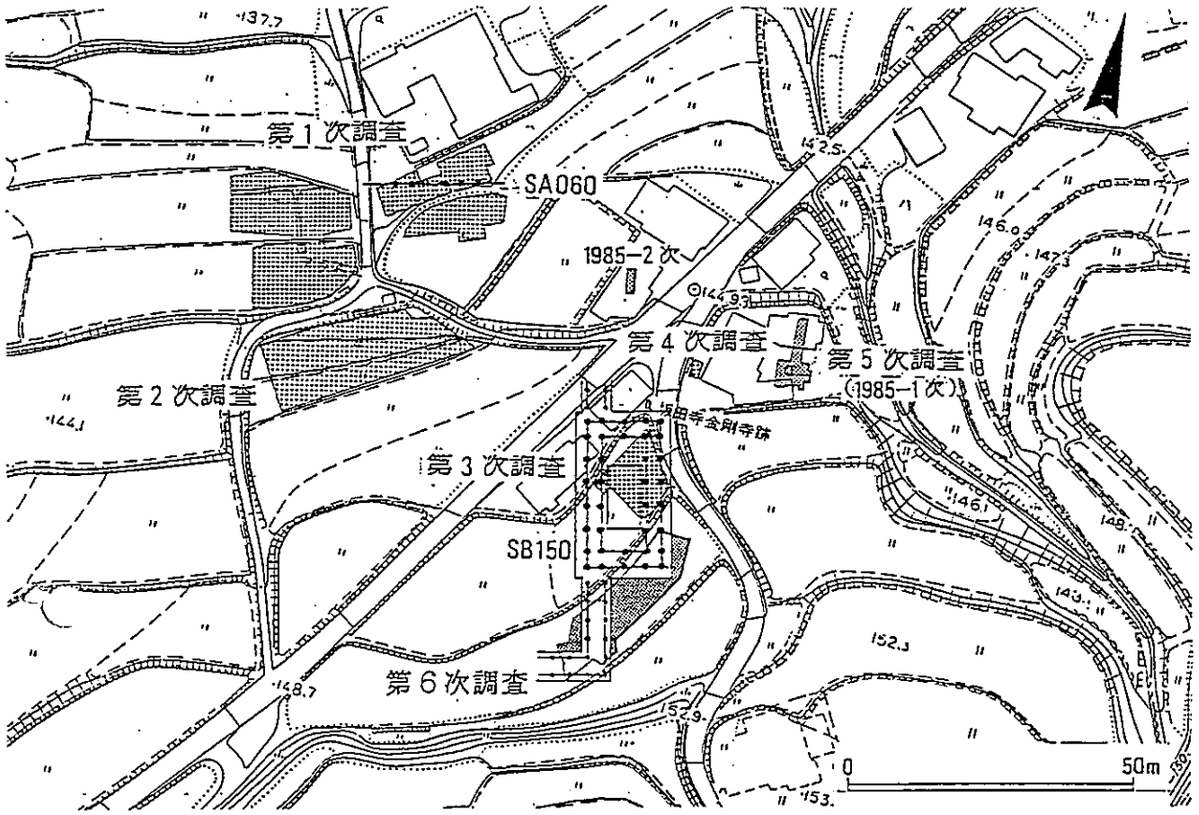
伽藍中枢の建物と考えられる仏堂の規模・構造が確定した。仏堂の造営年代は第３次調査成果によれば、天平神護元年（765）から、延暦15年（796）の間である。仏堂は、第３次調査では焼失したと考えていたが、立ち腐れで倒壊したことが判明した。なお、仏堂・廻廊ともに檜皮葺の可能性がある。奈良時代の檜皮葺寺院の例には石山院などがある。仏堂はどの建物に比定できるであろうか。須弥壇が身舎の梁間いっぱいにとられている点、仏堂の背後（東側）に別の基壇建物が存在すること、桁行が７間あることに注目すれば金堂の可能性が強い。しかし、両脇間を除いた正面が等間であること、軒の出が浅いこと、基壇が低く外装が雑なこと、基壇面が土間床である点から講堂の可能性も捨てきれない。今回の調査で、仏堂に廻廊が取り付くことが判明したが、これは決め手にならない。この問題については今後の調査の進展を待ちたい。建物の規模は、金堂とすれば興福寺東金堂・陸奥国分寺金堂・上野国分寺金堂、講堂とすれば美濃国分寺講堂などが近い。

廻廊の位置及び廻廊と仏堂との関係についての手がかりが得られた。西面する仏堂の西側に廻廊に囲まれた一郭が存在し、仏堂の南北両脇に廻廊が取り付いていたと見られる。ただし、第２次調査成果と合わせると、廻廊は仏堂の東西方向の中軸線に対し対称の配置であったとは考えにくい。なぜなら、仏堂に取り付く南北廻廊は、仏堂の南側では桁行５間であるが、仏堂の北側でも５間とると、第２次調査で検出した８世紀代の高い石垣の北側に出てしまう。この石垣の南側にはかねてより廻廊の存在が予想されていたのである。石垣上は後世の削平を受けており、廻廊の遺構は検出されていないが、石垣のすぐ南側に北面廻廊を想定すると、廻廊で囲まれた区画の南北長は約58m（195尺）となり、海龍王寺・甲賀寺程度の規模となる。

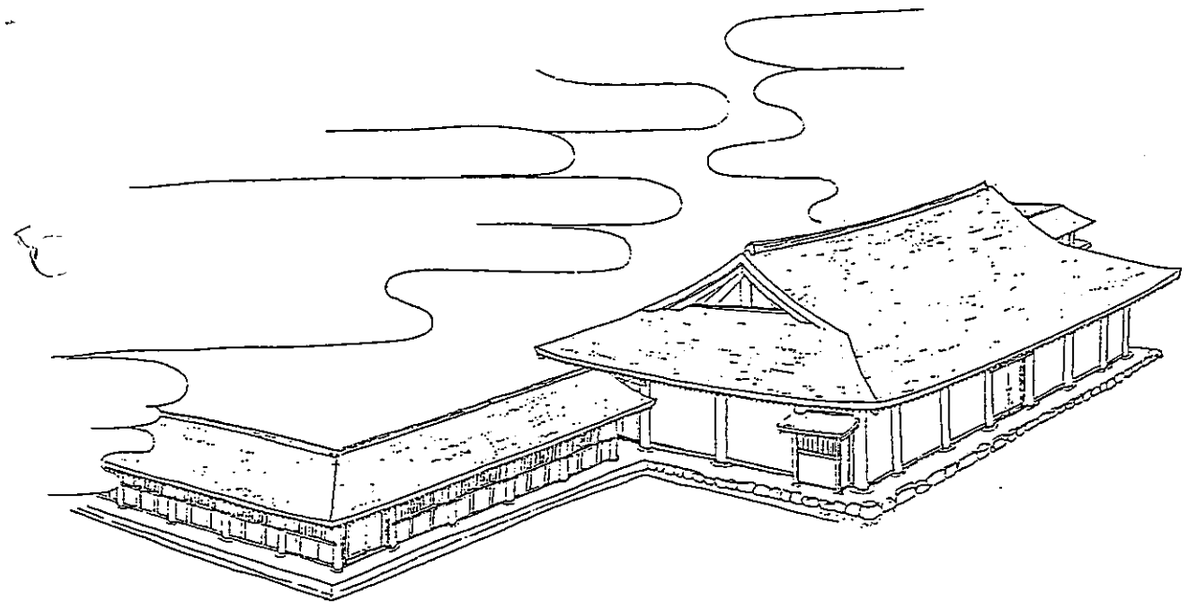
今回、伽藍配置についての重要な知見を加えることにより、８世紀後半の坂田寺の様相がいっそう明らかになった。規模は平城京の大寺と比べれば小振りなものの、地方の国分寺クラスであり、立派なものと言えよう。この時期の坂田寺がこれほどの大規模な造営を行えたのは、天平勝宝元年（749）に東大寺大仏殿の東脇侍を寄進した尼信勝など有力な尼僧や後援者の存在を背景に考えるべきであろう。

坂田寺略年表

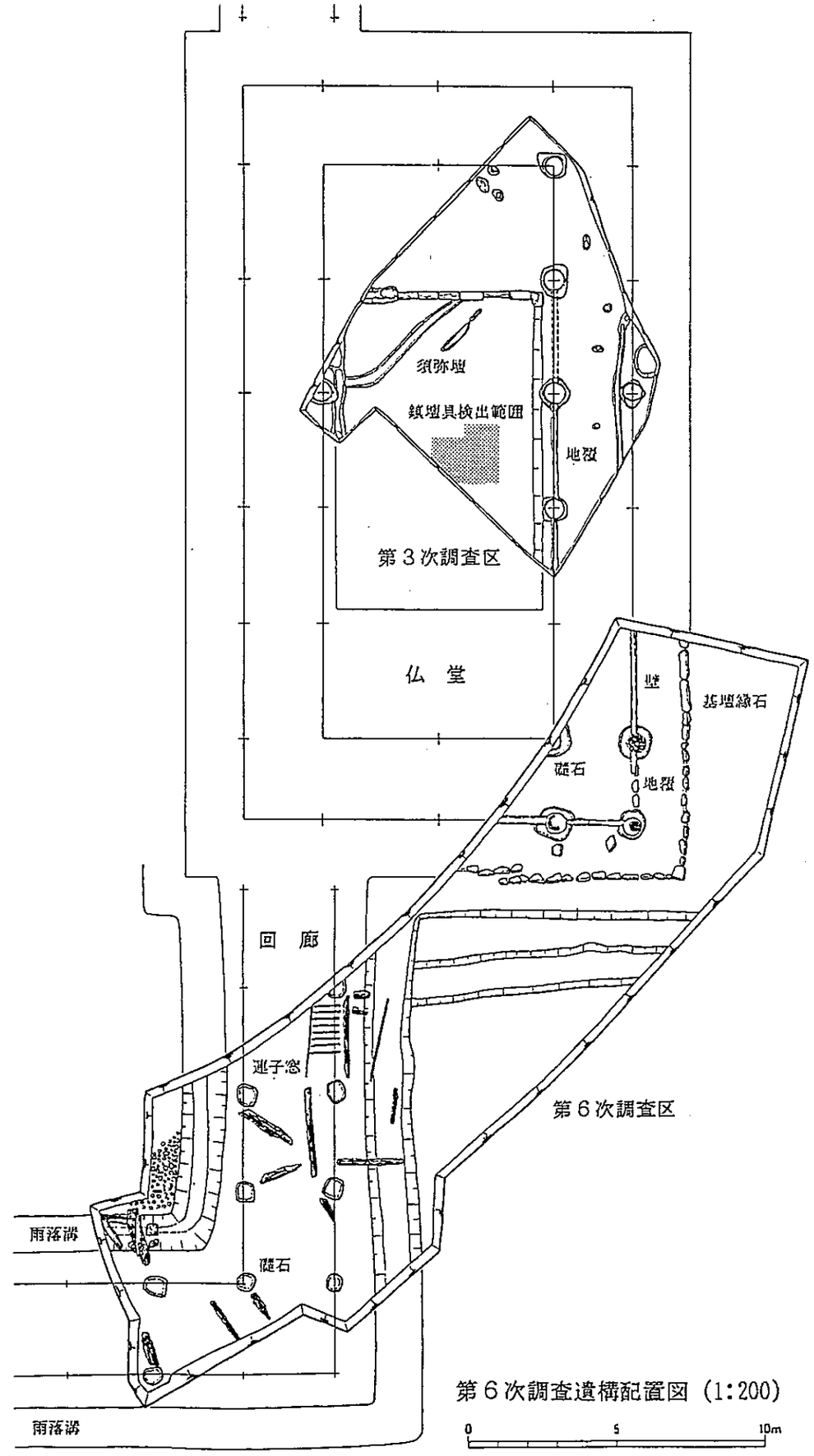
587（用明２）年４月	鞍作多須奈、天皇のために出家し、丈六仏及び寺を作ることを誓願する。南淵坂田寺の丈六仏と脇侍の菩薩がこれである。
606（推古14）年５月５日	鞍作鳥の功を誉めて大仁位を賜い、近江国坂田郡に水田廿町を給う。鳥、此の田をもって天皇の為に金剛寺（坂田寺）を作る。
686（朱鳥元）年12月	天武天皇の為に無遮大会を大官大寺・飛鳥寺・川原寺・小墾田豊浦寺・坂田寺の５寺に設ける。
737（天平９）年10月30日	坂田寺尼信勝、法苑林章14巻を内裏に進める。［大日本古文書7-24］
742（天平14年）年頃	坂田寺尼信勝、優婆夷を貢進する。［大日本古文書8-138］
746（天平18）年８月５日	坂田寺信勝尼御所において最勝王経略賛を請け、また六巻抄６巻を貸し出す。［大日本古文書9-365］
749（勝宝元）年４月８日	坂田寺尼信勝、東大寺大仏の東脇侍観音菩薩像を造る。［東大寺要録７］
752（勝宝４）年４月９日	坂田寺尼信勝、東大寺大仏開眼会に物を献納する。［正倉院御物銘文集成］
1070（延久２）年９月	坂田寺、雲飛庄に三反、南喜殿庄に十六町百八十歩の寺田をもつ。［興福寺雑役免坪付帳］
1172（承安２）年８月４日	坂田寺、多武峯の末寺となる。［多武峯略記］
1173（承安３）年正月晦日	坂田寺の本主永厳、坂田寺流記公験を多武峯に進める。［多武峯略記］
1173（承安３）年６月	多武峯が坂田寺を末寺にし山王祭を行ったことから、興福寺が多武峯を焼討ちする。［多武峯略記］
1441（嘉吉元）年	興福寺は大和国内に25箇所の末寺・末社を有していたが、その中に坂田寺（坊舎８宇、衆徒10人）が含まれていた。［興福寺官務牒疏］



坂田寺第6次調査位置図



坂田寺伽藍推定復原図



第6次調査遺構配置図（1:200）